



Title	懷徳堂の人々（四）同志の人々：懷徳堂を支えた五同志
Author(s)	脇田，修
Citation	懷徳. 1988, 57, p. 15-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90694
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂の人々（四）

同志の人々

——懷徳堂を支えた五同志——

「懷徳堂の人々」の連載も、創立期の先生方や堂の周辺についての話が終わりましたので、今回は懷徳堂創設に力のあつた町人を中心述べたいと思います。

いうまでもなく懷徳堂は五人の大坂町人を中心に創設され、管理・運営されました。三星屋武右衛門・舟橋屋四郎右衛門・道明寺屋吉左衛門・備前屋吉兵衛・鴻池又四郎のいわゆる五同志がそれにあたります。また五同志の他にも支持者はかなりいましたし、讃岐国琴平の木村家の人々も忘れてはならないと思います。

懷徳堂の設立

一七二四年（享保九）懷徳堂は設立されましたが、この前史がありました。初代学主三宅石庵は、一七〇〇年（元禄十三）頃に大坂に来たようです。そして尼崎二丁

脇 田 修

目御靈筋に住んでいたといわれますが、一三年（正徳三）八月には安土町二丁目に多松堂という塾をつくりました。後の記録によれば、三星屋・舟橋屋・道明寺屋や讃岐の木村平右衛門らは入門していたようです。おそらく寄付金を出し、堂の運営をおこなって、懷徳堂の運営に近いことがおこなわれたと思われます。しかしこの同志のなかに不適當な人物がいるとして、石庵の意志で多松堂は閉鎖され、一時、高麗橋筋三丁目の芋屋三郎右衛門の隠居屋敷を借宅して移りました。しかし二四年（享保九）三月、妙智焼といわれる大坂の大火にかかり、石庵は平野郷へ避難します。平野郷は戦国時代の自治都市で、当時は大坂南部の綿作地帯の中心として繁栄していました。ここには懷徳堂の関係者とも親しかった土橋九郎右衛門や土橋四郎右衛門らがいて、一七年（享保二）

には含翠堂という塾をつくっていました。この堂の設立には多松堂の存在が影響していると思うのですが、またそれが懷徳堂の設立に刺激を与えました。含翠堂の命名は石庵がおこなったものです。

含翠堂では、定額の掛金をする六名の同志がいて、堂の管理・運営にあたり、他に寄付金を募りました。土橋四郎右衛門の「含翠堂記」には興立生員六名と助力生員として道明寺屋ら一〇名が記されています。今でいえば正会員と賛助会員でしょう。その後、掛け金の額や同志中の異動もありましたが、基金ができました三二年（享保十七）に掛金をやめ、寄付のみとしています。多松堂の時には、どのような運営をしていたかはわかりませんが、懷徳堂では創立の五同志が興立生員にあたります。管理・運営にあたる者は信用のできる者に限っているので、ただ金を出すだけではなかったのです。あるいは多松堂の経験から、このようなやり方をとったのかも知れません。その後は、どのようにしたのか明らかではありませんが、懷徳堂定約の署名者などが当時の同志中であつたのでしょう。のちには中井家が運営していますから、性格はかわつたと考えられます。

五同志のこと

五同志のなかで、多松堂の時代から三宅石庵を支えたのは、三星屋・舟橋屋・道明寺屋の三名でした。

三星屋は中村氏で名を睦峰、号を良斎といいました。一六七四年（延宝二）九月二日生まれ、一七三二年（享保十七）四月四日になくなったようです（『大阪人物誌』）。安土町二丁目に住み、貸家業などを営む裕福な町人でした。同町に多松堂ができたのは、彼との関係からと思われます。懷徳堂定約の起草者であり、長者の風があつたといわれ、石庵は「予三郷の土と交ること多し。然れども才徳兼備、良斎の如きものは未だこれを見ず」といっています。そして庄蔵、号を東庵といったその子も三五年の定約に署名していて、懷徳堂と関係が続けていました。

舟橋屋は、長崎克之といいますが、生没年などわからない人物です。ただ延享版「難波丸綱目」には関東筋問屋のなかに、高麗橋一丁目の船橋屋四郎右衛門があります。後記の「仁風一覽」にも出ていますので、本人とみてもよいでしょう。

一七二六年（享保十一）五月、含翠堂の土橋四郎右衛

門が石庵より銀四四一匁四分六厘を借りました。銀一貫匁につき月利八匁、十二か月で年利九・八パーセントになります。一年で返却しています。このことは石庵が売薬業をおこなって富裕であったという一つの証拠になります。この借金証文の裏書は石庵の代理として舟橋屋が署名して、貸銀が返却されたことを確認しています（『平野含翠堂史料』）。これはいわば石庵の私的な貸借関係ですが、この世話をおこなっていることは、舟橋屋と石庵の関係の深さを示しているといつてよいでしょう。石庵死後、贅庵と対立し、世話役を引退し、義絶したといえます。この理由についてはわかりませんが、贅庵のあとを三宅春楼が継いだとき復帰していますから、おそらく懷徳堂の後継者に贅庵になることに反対だったのではないのでしょうか。宝暦の定約付記には父子で署名しています。

道明寺屋は富永氏、名は徳通、号を芳春といいました。彼も多松堂からの門人です。彼の居宅は尼崎一丁目にあり、その南側に表口十間・裏行二十間の屋敷を構えていましたから、なかなかの本店です。家業は醤油製造といわれ、中井竹山は「懷徳堂内事記」に「醬油蔵」と記していますが、肥田暗三氏によって漬物屋としても名

が高かったということが指摘されました。これは一六七九年（延宝七）の「難波鶴」の記載によるものですが、「難波丸綱目」には江戸積醬油屋・「薬酒并漬物」として出ています。現在でも酒造会社で奈良漬をつくっているところがありますから、これと同じようなものでしょう。ただし安永版には江戸積醬油屋にはでなくなり、漬物屋のみ残っています。九八年（寛政十）の地図には居宅がなくなっていますので（矢内昭「懷徳堂の立地を支えた尼崎町界限の町並み」『懷徳』五六号）、徐々に家業は衰退したのでしょうか。道明寺屋は居宅の向かい側になるところに、表口六間半・裏行二十間の持地があり、その東隣にある尼崎屋市右衛門の屋敷、表口五間・裏行二十間をあわせて、懷徳堂の敷地となりました。この土地については幕府から道頓堀に代地をもらい、その地代銀二十貫が道明寺屋と尼崎屋にわたされています。しかし道明寺屋が懷徳堂に持地を提供したことには替わりなく、また彼の別家道明寺屋新助は支配人として懷徳堂の世話を勤め、たとえば節句のさいの謝礼は新助に渡すように決めています。

備前屋は、吉田盈枝、号を養斎また可久といいました。一六九〇年（元禄三）の生まれで、一七六七年（明

和四）七月十九日没、伏見堀兩國町に住み、町年寄を勤めました。鰐庵は彼の借家にいたことがあります。一七一九年（享保四）高麗橋筋三丁目時代に入門しています。二五年（享保十）鰐庵が懷徳堂の公許をえようと江戸へ下りました時には、道明寺屋とともに同道したほどで、懷徳堂の公許を大坂町奉行所へ願ひ出る時も、鰐庵と同道して出頭していました、大いに懷徳堂のためにつくしました。彼の息子吉兵衛も懷徳堂に尽力し、五四年（宝暦四）鰐庵の遺書がつふられた時には宛名人に入っており、定約付記には父子で署名しました。ところで備前屋は「難波丸綱目」には両国町に住む備前国問屋または日向国問屋として記され、また日向材木問屋や船板帆柱中買としてでています。備前の分については扱かう商品名はわかりませんが、延宝年間の「難波鶴」に舟板問屋とあり、伏見堀の辺は材木問屋が多いので、舟板を中心にした材木問屋と考えていいでしょう。

鴻池又四郎は山中宗古といひ、尼崎二丁目に住み、著名な豪商鴻池の一族です。もともと堺の日野屋七左衛門の子でしたが、鴻池本家二代宗利の養子として、三代宗誠の娘津世と結婚し分家しました。一六九二年（元禄五）生まれで、一七五四年（宝暦四）二月六日になくな

りました。彼の入門はもっとも遅いのですが、五同志のなかに入っています。「難波丸綱目」によれば、彼は周防国岩国六万石の吉川家の銀掛屋、石見国津和野四万三千石の亀井家の蔵元であり、とくに半紙蔵元とその銀掛屋となっています。吉川家の蔵元は常安町の塩屋新兵衛ですが、両藩ともに岩国半紙・石見の吉賀半紙と紙の産地として知られ、藩財政は紙に依存しているところが大きく、又四郎はこの蔵物の紙の管理と経理をおこない、もちろん大名貸をおこなったのでした。鰐庵の遺書には、懷徳堂の基金を彼に預けているとありますが、その財産と業種からみても当然の措置といえましょう。

五同志以外にも、多くの人々が懷徳堂を支えました。一七三五年（享保二十）定約に連署した人は五同志の道明寺屋・鴻池・備前屋に三星屋の子東庵でしたが、その他に広岡藤八・古金屋助十郎・泉屋五郎兵衛・平野屋清助・同平作と鰐庵・春楼でした。このうち古金屋は備前・備後の国問屋、泉屋は延享版には唐物町一丁目に多葉粉新問屋とあり、安永版には備前国問屋で高麗橋一丁目という名前がでています（難波丸綱目）。

尼崎屋の一族は、尼崎一丁目の開発者ではないかと考えられますが、市右衛門は金崎氏で、堂地を提供し、の

ちに懷徳堂定約付記に署名しています。梶木町に住み、「難波丸綱目」に京積醬油屋として出ています。この七右衛門は金崎元永といい、字を子貞、号を松宇、梶木町に住みましたが、懷徳堂の開講会徒連名にも出ていますから、初期からの支持者です。のちには中井家と関係が深く、懷徳堂定約付記にもその子が署名しています。竹山のころは両尼崎氏に懷徳堂の世話を任せるような関係だったようです（肥田皓三「懷徳堂に寄与した尼崎屋一族」『懷徳』五四号）。なお道明寺屋の先輩は金崎氏ですから、尼崎屋一統の人と考えてよいでしょう。

讃岐の木村家も懷徳堂の有力な後援者でした。この家は松原秀明氏によれば、金毘羅宮の別当であったようです。平右衛門（号を寸木）といった人と三宅石庵とは親しかったようで、石庵は大坂に来る前に讃岐に滞在したこともありましたが、学問だけではなく、俳句をも共にしていました。多松堂の創立時から後援をし、懷徳堂の創設にあたって、その子の平十郎・平蔵が堂のためにつくしました。のちに懷徳堂の敷地のなかに、遠隔地の門人のために寮を立てています（松原秀明「金毘羅別家木村家の人々」『懷徳』四一号）。

なお三二年（享保十七）に西日本にいなごの害による

飢饉がおこったため、米価が高騰して貧しい人々が困ったので、富裕な町人による寄付がなされました。この人名は「仁風一覽」として刊行されています。これは巨額の寄付者を除いて、町名と名前しか記されていませんし、借家を持っていたときは各町で重複して金銀・米などを出していますから、その本宅がどれかわからないこ

三星屋 庄 蔵	安土町二丁目
船橋屋 四郎右衛門	高麗橋壱丁目・長町四丁目
鴻池屋 又 四 郎	今橋二丁目
古金屋 助 十 郎	瓦町壱丁目
泉 屋 五 郎兵衛	九之助町壱丁目
平野屋 清 助	順慶町壱丁目・天満九丁目

両国町には記載なし、尼崎一丁目は四名あるも、道明寺屋・尼崎屋の名はない。尼崎屋は梶木町に市右衛門・七右衛門が出ている。

ともありますし、また町によっては記載がないことがありますので確実とは申せませんが、懷徳堂の關係者では、次の人々はまず確かでしょう。（一九頁表参照）

町人の學問

懷徳堂を支えた人々は、これまで見てきましたように、大坂の富裕な町人でした。厳密に言えば、鴻池・天五・平五の本家などの超一流の豪商ではありません。鴻池又四郎は鴻池の別家として、藏元を勤め大名貸をおこなうことができる商人でしたが、他は国問屋として現物取引をおこなう大坂の上層町人でした。大名相手の家業もふみたおしや支払い延期などで、なかなかむずかしかったのですが、このころには体制的にも決まっていた、鴻池一統であれば、それほど危険はなかったでしょう。贅庵が懷徳堂の金を預けたのは、もっとも適当とみたからでしょう。しかし実際に市況をにらみながら、商売をする問屋の場合は、かなり浮沈がありました。道明寺屋をはじめ、同志の家が衰退していったのは、そのことを示しています。道明寺屋は醤油と漬物製造でしたが、關東の銚子・野田の醤油製造業が盛んになってくるにつれ、江戸積醤油も影響をうけたことと考えられます。

大坂は商業の町で、最近でこそ文化都市への夢が語られたりしますが、全体に言えば文化や學問に縁の薄い町です。町人の家では、趣味として詩文をつくったりすることは認められていましたが、本格的に學問をすることは好みません。それは家業にさわるからでした。上田秋成が「今橋の學問所、万年先生の時は、さして學問をさすではなしに、むすこを先あずけて、よい事を少しでも聞す事のみ、又金づかひになりおると、さそくあづけておく所也」（胆大小心録）と述べていますのは、儒学の學問所として天下の名高い中井兄弟の時代でしたが、この文章は大坂町人の懷徳堂に期待するところを明確に語っています。

したがって、同志たちは好學の人たちであります。いわゆる學者ではありませんでしたから、彼らが残した文章は、ほとんどありません。道明寺屋・富永芳春は五同志のなかでは、もっとも學問に熱心でして、含翠堂の創立にあたっては、九年間にわたって毎年金一分を寄付し、助力生員と記されていますし、含翠堂の教師となった沢田元立の請人となっています。また含翠堂には彼の「忠孝自反」の和歌が残っています。忠孝 かざりなくおもふ心のふかけれハ

つらさもしらぬものにそ有ける

自反　いかばかり人のつらさをうらみまじ

我身のとがとおもひなさずハ

この和歌の心は説明するまでもありませんが、いかにも真面目に自省する心構えを説いています。これが懷徳堂に学んだ同志の気持をよく表しているのでしょうか。そして懷徳堂に期待したのも、このような学問だったのでしょうか。

彼の息子に、富永仲基・荒木蘭臯がいますが、とくに仲基は日本で珍しい独創的思想家でした。彼は懷徳堂の

学風とあわず、「説弊」を表して、石庵の怒りがあったといわれています。父親との関係もあり、石庵も困ったでしょうが、結局、仲基は懷徳堂から離れました。道明寺屋の後を継いだ仲基の異母兄は、懷徳堂と関係があり、斃庵の遺書にも宛先となっています。

主要参考文献　西村天囚『懷徳堂考』懷徳堂・友の会復刊、『大阪の学問——懷徳堂・適塾』大阪大学刊、梅谷文夫・水田紀久『富永仲基研究』和泉書院刊。宮本又次『町人の社会の学芸と懷徳堂』文献出版。

（大阪大学教授）